

2023 AC

The 2<sup>nd</sup> Celebrate Hanukkah

原語で味わう創世記第2章

12/24~31

No.6 27日(朝)

# 「創世記2～3章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

イザヤ書34章16節

主の書物を調べて読め。

これらのもののうち、どれも失われていない。

**それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。**

それは、主の口がこれを命じ、

主の御霊がこれらを集めたからである。

※ 「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。それに出会わせてくれるのは御霊です。

# 「創世記2～3章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】  
イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、  
まだなされていないことを昔から告げ、  
『わたしの計画は成就し、  
わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

①ここには強調するために、パラレリズム修辞法が使われています。

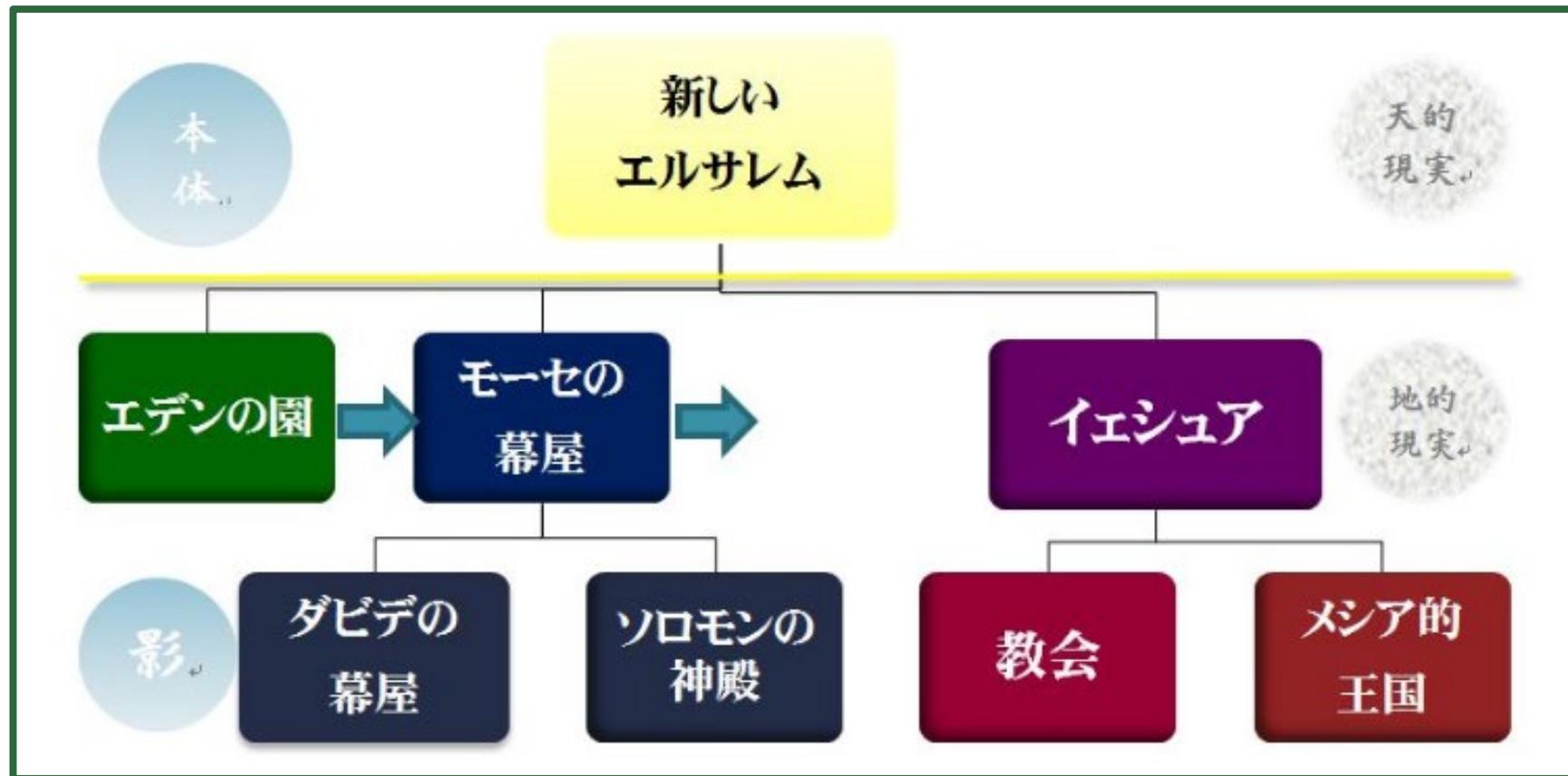
②初めのなかに後のこと、まだなされていない将来のことが  
折り重なるようにして(重層的に)告げられているということです。

「・・・こと」とは「神のご計画」のことです。

これを知るためには、たましいではなく、霊の中で悟る必要があるのです。

# 「エデンの園」の本体は「新しいエルサレム」

- それは「天」にあり、しかもすでに完成されているのです。



# 1. 2章15節(テキスト) ①

【新改訳2017】創世記 2章15節  
神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、  
そこを耕させ、また守らせた。

●この箇所には四つの新しい語彙があります。動詞と不定詞です。

(1) 「連れて来た」 (「ラーカハ」  $\text{לָקַח}$ )

(2) 「置いた」 (「ヌーアツハ」  $\text{נָתַח}$ )

(3) 「耕す」 (「アーヴァド」  $\text{עָבַד}$ ) ・ ・ 「耕すため」

(4) 「守る」 (「シャーマル」  $\text{שָׁמַר}$ ) ・ ・ 「守るため」

# 1. 2章15節(テキスト) ②

【新改訳2017】創世記 2章15節  
神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、  
そこを耕させ、また守らせた。

ヴェガンエーデン    ヴァヤツニヘーフ    エット・ハーアーダーム    エローヒーム    アドナイ    ヴァイツカハ

יְקַח יְהוָה אֱלֹהִים אֶת־הָאָדָם וַיִּנְחֵהוּ בְּגַן־עֵדֶן

エデンの園に    そしてそれを置いた    その人を    神である    主は    そして連れて来て

וַיַּעֲבֹדָהּ וַיִּשְׁמְרָהּ

ウーレシャームラーハ    レアーヴダーハ

かつそこを守らせるために    そこを耕すために  
不定詞+前置詞    不定詞+前置詞

- 「そこを」を意味する女性名詞語尾「ハ」(ה)は、エデンの中の「園」(גן)を意味しています。  
「ガン」(גן)は男性・女性併用です。

## 2. 「連れて来る」(「ラーカハ」לָקַח) ①

●エデンの園が設けられたのは、そこに人を「置く」(לָקַח=任命する)ためでした(2:8)。ところが、すでにそこにはケルヴがいたのです。

【新改訳2017】エゼキエル書28章12～15節

- 12 「人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。神である主はこう言われる。あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。
- 13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。
- 14 わたしは、油注がれた守護者ケルビム(原文は「ケルーヴ」כַּרְבַּיִם)としてあなたを任命した(「ナータン」נָתַן)。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いていた。
- 15 あなたの行いは、あなたが創造された日から、あなたに不正が見出されるまでは、完全だった。

## 2. 「連れて来る」(「ラーカハ」**לָקַח**) ②

●ケルヴが創造された日に「神の園であるエデンも整えられた」とあります。そしてケルヴは、そこであらゆる宝石に取り囲まれていたのです。ところが、そのエデンの園に、神である主は「人を連れて来て置かれた」(2:15)のです。このときケルヴはどう思ったのでしょうか。聖書には何も記されていません。おそらく、妬みを覚えたのではないのでしょうか。妬みの三角構造は「神とアベルとカイン」にも見られます。妬みを覚えたカインはアベルを殺します。創世記3章に登場する蛇はケルヴの化身です。

●「連れて来る」は「ラーカハ」(**לָקַח**)で「取る、取られた、取り出す」を意味します。しかし初出箇所はこの2章15節では、「めとる」という意味で用いられています。つまりここに「神と人が結婚するという概念」が啓示されているのを見ることができます。人には、神を表現するための地(大地)を「耕し、守る」という尊い務めが与えられたのです。このことは、被造物のケルヴとしては寝耳に水だったに違いありません。

## 2. 「連れて来る」(「ラーカハ」 הֲקִיף ) ③

● 「連れて来る」と訳された「ラーカハ」(הֲקִיף)は、創世記2～3章に8回も使われています。基本的には「取る、受け入れる」という意味ですが、妻を「めとる」という意味があります。

①人をエデンの園に「連れて来た」(2:15)、②生き物たちを人のところに「連れて来られた」(2:19)、③主は彼のあばら骨の一つを「取り」(2:21)、④女を人のところに「連れて来られた」(2:22)、⑤女はその実を「取って」食べ(3:6)  
⑥あなたはそこから「取られた」のだから(3:19)、⑦いのちの木からも「取って」食べ(3:22)、⑧人が自分が「取り出された」大地を(3:23)

●⑤と⑦を除いて、すべて神である主がなされたこととして使われています。「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを見た。」(出19:4)とあるように、神である主が「連れて来た」のには目的があります。その一つが人をエデンの園に「置く」ためでした。

### 3. 「耕す」(「アーヴァド」 אָרַב) ①

●人をエデンの園に「連れて来て」、そこに「置く」のは神である主です。しかしそこを「耕し・守る」のは人です。

●「耕す」ことと「守る」こと、それは何を意味するのでしょうか。それはケルヴが妬むほどの尊い務めです。その務めとは「祭司的務め」と「王的務め」です。「祭司的務め」は「耕す」(「アーヴァド」 אָרַב)という語彙によって、後者の「王的務め」は「守る」(「シャーマル」 שָׁמַר)という語彙によって代表されています。

A. 「祭司的務め」 ・ 神の声を聞くことで、神を知り、神と交わり、神からのいのちの流れにあずかる務めです。

B. 「王的務め」 ・ ・ 祭司的務めを支えるための外的な力と権威です。

### 3. 「耕す」(「アーヴァド」 אָרַב) ②

●最初のアダムに与えられたエデンの園における「祭司的務め」と「王的務め」は、イスラエルの幕屋・神殿においても、またエックレーシア、御国においても重要な務めです。イスラエルとエックレーシアは

- (1) 「祭司の王国・・となる」(出エジプト記19:6)、
- (2) 「王である祭司・・とされた」(1ペテロ2:9)、
- (3) 「王国とし、祭司としてくださった」(黙示録1:6)

と記されています。「耕すこと」と「守ること」、すなわち「祭司的務め」と「王的務め」は、神の家である幕屋、神殿、エックレーシア、御国に住む者の変わることのない永遠の務めなのです。

●それゆえイエシュアは「最初のアダム」の失敗を、そして「イスラエルの民」の失敗を踏み直すために、「最後のアダム」として、また真のイスラエルとして、その務めを回復するために来られたのです。メシア王国はエデンの園での務めが回復した姿です。

### 3. 「耕す」(「アーヴァド」 אָרַב) ③

- 「アーヴァド」(אָרַב)は創世記2章5節ですでに登場しています。

地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。  
神である主が、地の上に雨を降らせていなかったからである。  
また、大地を耕す人もまだいなかった。

- 「アーヴァド」は祭司用語で、旧約で317回使われています。創世記2～3章では3回(2:5,15, 3:23)です。「耕す」と訳された動詞の「アーヴァド」(אָרַב)は、神に「仕える」「礼拝する」と同義ですが、それ以上に「神の声を聞くことで、神を知り、神と交わり、神からのいのちの流れにあずかる務め」です。そのために、園には「木」と「川」があり、人がそれを食べ、飲むことでその務めを果たすことができたのです。神である主は人を神のすべてを入れる容器として形造られました。それは大地(「ハーアダーマー」 אֶרֶץ)において、人が祭司として、神を表現するためです。

## 4. 「守る」(「シャーマル」 שָׁמַר)

●なぜ「守り」「耕す」という順ではなく、「耕し」「守る」という順なのでしょう。これは「守る」という王的務めの前に、「祭司」の務めがなければならないことを示しています。神を知ることなしに、王の務めはできません。イスラエルの最初の王サウルは、なぜ王の務めを破棄されたのでしょうか。それはサウルが祭司的務めをないがしろにしたからです。事実、サウル王は神からアマレクを聖絶せよと命じられていたにもかかわらず、彼は聖絶すること(「ヘーレム」 הָרַק = すべてを神に献げるという行為)なく、価値のあるものを自分の所有とし、価値のないものを神に献げました。これは祭司としてあり得ない行為です。王である前に、祭司的務めがいかに重要であることを示しています。彼の後に立てられた王ダビデは「ただ一つのこと」を求めた人です。その一つとは、「神を求める祭司的務め」です。

## 5. 「耕し」「守る」の奥義 ①

● 「祭司的務め」があつて「王的務め」がなされることは、神の御子イエシュアが来られて、人を贖い、人を新創造する出来事の中に見ることができます。

### A. イエシュアの人としての務め

● イエシュアは聖霊によって受肉され、その霊は人としての成長とともに強められていきました。12歳の時、イエシュアが神のことばによって生きていることが証しされました。そして30歳になった時、正式に「祭司(および預言者)としての務め」を開始されます。その際に、ヨハネから洗礼を授かっています。これはイエシュアが私たちを取り込んで、人と一体となるためでした。まさにヨハネはこの務めのために、誕生の時から聖霊に満たされていたのです。イエシュアはすでに内に聖霊が働いているにもかかわらず、洗礼を受けた時に、天が開けて神の御霊が鳩のように彼の上に降って来ました。これはイエシュアが「王なる務め」を果たすためです。同じことが使徒の働き2章で起こります。

## 5. 「耕し」「守る」の奥義 ②

### B. 弟子たちの務め

● イエシュアは公生涯における人の務めとして、受難と十字架の死において「最初のアダム」を完全に終わらせました。そして三日目に復活し、イエシュアは「いのちを与える霊」となって弟子たちの霊の中に入り、機能不全を起こしていた彼らの霊を再生させました。そのことによって、弟子たちの内なる霊が満たされたのです。これはすでに、信じるすべての人に対しても包括的になされているのです。

● そのことによって、彼らは祭司的務めが回復されたのです。これを「**プレーロー**」(πληρώω)で言い表します。「**プレーロー**」は「内側を満たす」という意味だけでなく、神のご計画を「理解する」ことをも意味します。しかし、これだけでは王的務めを果たすことはできません。

## 5. 「耕し」「守る」の奥義 ③

● イエシュアは昇天される前に、弟子たちに次のように言われました。

① 【新改訳2017】ルカの福音書24章46～49節

46 こう言われた。「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』エルサレムから開始して、

48 あなたがたは、これらのことの証人となります。

49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。

あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

② 【新改訳2017】使徒の働き1章8節

しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

## 5. 「耕し」「守る」の奥義 ④

- 「いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい」、および、「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、・・わたしの証人となります」とイエシュアは言います。つまり上からの力を受けることで「王なる務め」が可能となるのです。この上からの聖霊によって力に満たされることを「ピンプレミ」(πίμπλημι)と言い、「聖霊によるバプテスマ」とも言います(使徒1:5, 11:16)。
- エデンの園では、人は神のことばである「いのちの木」を食べ、神の聖霊である「いのちの水の川」を飲むことで「耕し、守る」という務めを果たすことができていたように、イエシュアの弟子たちも内と外が聖霊に満たされることによって、「王なる祭司」の回復がなされたのです。この「王なる祭司の靈性」こそが「花嫁の靈性」なのです。

## 今回のまとめ

- 今回は2章15節のみを学びました。この節で大切なことは二つです。神である主が人をエデンの園に連れて来た目的の一つは、神と人が結婚して、人が永遠の身の置き所として安らかに住む(「ヌーアツハ」<sup>11</sup>)ためです。これについては、No.4の講義で学びました。
- そしてもう一つの目的は、人が「木」を食べ「川」の流れの水を飲むことによって、「耕すこと」と「守ること」という務めをなすためです。換言するなら、それは「王なる祭司としての務め」を果たすということです。しかしこれは、サタンの妬みを引き起こすことでもありました。神はそれを予知して人に警告しているのです。「**善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べる時、あなたは必ず死ぬ**」と。このことについては、次回に学びます。